「個」と「関係性」からみたアイデンティティ研究の動向と展望
—発達早期における「個」と「関係性」の起源に着目して—

宗田直子・岡本祐子

A review and some considerations on researches of identity from the viewpoints of "individuation" and "relatedness": Focusing on the origin of "individuation" and "relatedness" at early stages of development

Naoko Sota and Yuko Okamoto

本稿では，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ研究が展開される中で，発達早期における「個」と「関係性」の起源を考察する必要があることに着目し，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ生涯発達の基盤となる理論を概観した。そして，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ研究において，「関係性」の次元，すなわち，個体内関係性と社会的関係性をとらえる必要があることを提起した。今後は，「個」と「関係性」からみたアイデンティティに関する実証的証拠を提示すること，および，発達早期の自我形成がのちのアイデンティティに及ぼす影響について検討することが必要である。

キーワード：アイデンティティ，「個」と「関係性」，生涯発達

はじめに

Erikson (1950) が提唱したアイデンティティについて，これまで数多くの研究が行われてきた。近年では，アイデンティティ研究の中で見落とされがちであった他者との「関係性」の観点に着目した研究がすすんでいる（岡本，2006，2007）。アイデンティティにおける「関係性」に関する理論的・実証的研究が行われ，成熟したアイデンティティのとらえ方についての研究者間の見解の相違も指摘されてきた。このような中で，アイデンティティにおける「個」と「関係性」の概念を明確化し，実証的証拠を提示することは，現在のアイデンティティ研究の主要テーマである。

さらに近年では，生涯発達的観点からアイデンティティをとらえるうえでの，発達早期における自我形成，つまり，アイデンティティの基盤について，関心が集まりつつある。岡本（2002）が示すように，「発達の基盤である乳幼児期の自我，そして青年期のアイデンティティは，後の人生の中で，どの次元で変容し，後の発達を規定するのかという問題」は重要な課題である。発達早期の自我形成と青年期のアイデンティティ形成，および，「アイデンティティ再体制化（岡本，1985）」と

の関連を明らかにすることにより，アイデンティティ危機に対する発達臨床学的援助への道標を示すことができる。この課題にアプローチするために，発達早期の自我形成についての理論を詳細に検討する必要がある。つまり，アイデンティティを「個」と「関係性」からとらえる生涯発達論が展開される中で，青年期・成人期における「個」と「関係性」のみならず，発達早期からの「個」と「関係性」の起源を追及することが求められる。

本稿では，これらの問題に焦点を当て，アイデンティティ研究の動向を概観し，今後の展望を明らかにすることを目的とする。まず，近年のアイデンティティ研究における「個」と「関係性」に関する理論的研究を考察し，「個」と「関係性」からアイデンティティをとらえる必要性，および，具体的な課題について述べる。次に，アイデンティティの基盤となる発達早期の自我形成に着目し，主に精神分析学における発達論を考察する。第3に，「個」と「関係性」からみたアイデンティティの実証的研究を検討し，問題点と課題を指摘する。加えて，アイデンティティ生涯発達論を具体化するための実証的証拠の提示に関する方法論について言及する。

「個」と「関係性」からみたアイデンティティ

1．Erikson のアイデンティティ理論－精神分析的個体発達分化の図式 Epigenetic Scheme

Erikson（1950　仁科訳　1977）は，『幼児期と社会』において，精神分析的個体発達分化の図式 Epigenetic Scheme を提唱した。また，ライフサイクルにおける 8 つの心理社会的発達段階のなかで，第 5 段階，青年期における課題としてアイデンティティティの危機を明確化している。アイデンティティとは，「過去において準備された斉一性と連続性とが，他者に対する自分の存在の意味―「職業」という実体的な契約に明示されているような自分の存在の意味―の斉一性と連続性に一致すると思う自信の積み重ねである（Erikson，1950　仁科訳　1977）」。Erikson（1959　小此木訳 1973）が述べる健康なパーソナリティの要素―心理社会的発達段階―を，以下，簡単にまとめる。

第 1 段階は，基本的信頼　対　基本的不信である。生後 1 年の経験から獲得される自己自身と世界（他人）に対する一つの態度である。信頼の感覚が，子どもの中にアイデンティティの感覚の基礎を形成し，後にはこのアイデンティティの感覚が「自分はこれでいいんだ」という感覚や，自分が自分自身であるという感覚，他の人々からなるだろうと信頼されているものに自分がなってゆくという感覚を結合してゆく。第 2 段階は，自律性　対　恥・疑惑である。この段階の総括的な意義は，筋肉系の成熟，その結果得られる「つかまえておくこと」と「手放すこと」というはげしく葛藤しあう無数の行動パターンを協調させる能力（と同時に体験される無能力）である。第 3 段階は，自主性　対　罪悪感である。現実主義的な野心や独立の感覚の基礎となる「傷つかない主体性」の感覚を身につける段階である。第 4 段階は，勤勉性　対　劣等感である。子どもは，できるだけたくさんの職業につくことができるような幅広い基礎教育が与えられる。第 5 段階は，アイデンティティ　対　アイデンティティ拡散である。青年は，自分が自分であると感じる自分に比べて，他人の目に自分がどう映るかとか，育成されてきた役割や技術を理想型にどう結びつけるかといった問題にとらわれる。アイデンティティは，すべての各同一化の漸進的な統合から発達する。そしてこ

の統合は，児童期の種々の同一化の総和以上のものである。第6段階は，親密性　対　孤立である。アイデンティティの感覚が確立した後に，特定の経歴としての仕事とか研究，異性との交際，そして，やがては結婚して自分の家庭をもつといった人生が始まる。「性器性」とは異性愛の伴侶との関係の中で，オルガスム体験力（十分な性器の感受性や全身の緊張の完全な解放に伴う異性愛的な相互性）を発達させる潜在的な能力のことである。第7段階は，世代性　対　停滞である。親であることに関するものである。性器性を見出しつつある，あるいは，見出した伴侶たちは，自分のパーソナリティとエネルギーを，共通の子孫を生み出し育てることに結合したいと願うようになる。第8段階は，自我の統合性　対　絶望である。自分自身のただ一つの人生を受け入れることであり，ライフサイクルにとって，存在しなければならない，どうしても代理のきかない存在としての重要な人物を受け入れることである。自分の人生は自分の責任であるという事実を受け入れることである。

以上のようにErikson は，社会的・文化的・心理的・性的といった「関係性」の中でアイデンティティが形成されることを述べている。青年期までは，重要な他者への同一化，どのような人間になりたいのか，また，なるように求められているのかといった「関係性」が重視される。そして，成人期には性器的な「関係性」，次世代を育てる慈しみ・ケア，重要な他者の「受容」といった「関係性」が，パーソナリティの成熟であり，また，アイデンティティの発揮であることが示されているといえる。

2．「個」と「関係性」からみたアイデンティティに関する近年の理論的研究

1．で概観したように，Erikson は，アイデンティティが他者との関係の中で形成されること，そして，ライフサイクルが常に他者と関わりあって発達することを重視している。しかし，アイデンティティの概念を実証しようとしたErikson 以降の研究は，他者との「関係性」の観点をしばしば見落としてきた。それは，アイデンティティ研究が，西洋的な男性優位の個人主義の中で，自律や他者からの分離を発達の最優先課題としたものであり，また，男性を主たる研究対象とした男性研究者によるものであったからである（岡本，1999a；杉村，1999）。近年のアイデンティティ研究では，これに対する異論が提起され，アイデンティティ発達を，個体化の次元のみでなく，「関係性」の文脈からとらえ直そうとする試みが増加してきている（岡本，2002）。以下，アイデンティティにおける他者との「関係性」の重要性について述べた理論的研究を概観する。

(1)Gilligan の「配慮と責任の道徳性」

Gilligan（1982　岩男訳　1986）は，女性の自己描写が，アイデンティティと親密性の融合したものであり，過去に人を愛したことのある人間としての自分に関連づけて描くことを見出した。一方，男性の自己描写が分離を示す形容詞からなり，他者との係わり合いはアイデンティティの条件に結びついていることを見出した。このことから，女性の発達においては，アイデンティティを人間関係の中で定義し，道徳性が愛着から生じること，一方，男性のアイデンティティ達成は，力と分離によって確保されることを主張した。このように，Gilligan（1982　岩男訳　1986）は，自己のあり方における配慮と責任の道徳律を見出し，この2つが補い合ってはじめて成熟に至ることを述べている。Gilligan（1982　岩男訳　1986）の発見は，「分離の側面を強調してきたアイデンティ

ティ研究者に他者との関係の側面が重要であることを認識させるという，大きな役割を果たした（杉村，1998)」といえる。

Gilligan(1982　岩男訳　1986)の述べた配慮と責任の道徳律を，山本(1989)は，Separated-self, Connected-self として次のように整理している。Separated-self の特徴は「1．分離－個体化の発達に基礎づけられ，2．他者の反応や外的統制によらない，自律的行動（積極的自己実現・力の発揮）として現れ，3．　他者は自己と同等の互いに不可侵の権利を持った存在として，抽象的一般的に把握される」であり，Connected-self の特徴は「1．愛着と共感性の発達に基礎づけられ，2．他者の欲求・願望を感じ，その満足を目指す反応的行動（思いやり，世話）として現れ，3．自己と他者は互いの具体的な関係の中に埋没し拘束され責任をおう存在として把握される」である(山本，1989)。後述するように，これらは，「個としてのアイデンティティ」，「関係性にもとづくアイデンティティ」の特徴である（岡本，1997)。

(2) Franz & White の「生涯発達に関する複線（two-path）モデル」

Franz & White（1985）は，Erikson の心理社会的発達理論を再考し，人間の生涯発達を個体化の発達と愛着の発達という 2 つの経路で理解しようと試みる発達の複線モデルを提案した。彼女らは，Erikson の精神分析的個体発達分化の図式 Epigenetic Scheme における親密性と世代性の前にあるすべての段階は，（親密性と世代性に）付随する愛とケアの活力とともに，親密性と世代性の進展を表現する必要があると考えた。そして，Erikson の世代性への経路についての記述を正確にするために，愛着のプロセスに関心を払う必要があると述べた。個の経路に特徴づけられた危機は，親密性と世代性を除いて，Erikson によって記述されるものと同じである。親密性と世代性は，愛着の経路へ移った。成人前期と成人中期における個の経路，そして他の段階における愛着の経路の特徴を新たに示した。彼女らの述べた発達の複線モデルに関しては，次の２．でさらに詳細に検討する。

(3)Josselson の「関係性」発達の 8 次元に関する理論

Josselson（1992，1994）は，自律性と分離した自己にかわる概念として，アイデンティティ発達の関係的側面について理論化した。この関係性の次元は，人間相互の間に存在する空間を埋め合わせる主要な 8 つの方法であり，アイデンティティ理論を拡張したものである（Josselson，1992，1994)。彼女は，自己と他者のかかわり合いを乳児期から 8 次元で示している。8 次元は，抱きかかえ，愛着，熱情的な体験，目と目による確認，理想化と同一化，相互性，埋め込み，慈しみ・ケアである。最初の 4 つの次元―抱きかかえ，愛着，熱情的な経験，目と目による確認―は，基本的なものであり，生まれたときから（抱きかかえられる要求や満足感を駆り立てることに対する要求が)，あるいは，生まれてすぐ後から（愛着や目と目による反応の気づきが）存在する。次の 4 つの次元は，認知的な成熟を必要とするものであり，発達的に後から現われる。同一化と埋め込みは，どのように他者に配慮して自分を位置づけるかを考える能力といった自己概念を必要とする。相互性と慈しみ・ケアもまた，他者への敏感さと多分に関係しており，自己中心性から脱却し，他者の世界に入っていくという発達を必要とする（Jossselson，1992)。彼女の述べた「関係性」については，次の２．でさらに詳細に検討するが，杉村（1998）も指摘するように，これらの次元は，アイデン

ティティ形成における他者の役割を整理する際の枠組みとして重要な理論である。

(4)岡本の「成人期のアイデンティティをとらえる2つの軸」

岡本（1997）は，成人期のアイデンティティをとらえる 2 つの軸として，「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」を示し，両者のバランスのとれた統合が重要であると述べている。「個としてのアイデンティティ」は，「自分は何者であるか」，「自分は何になるのか」という個の自立・確立が中心的テーマであり，積極的な自己実現の達成へ向けて方向づけられる。一方，「関係性にもとづくアイデンティティ」は，「自分はだれのために存在するのか」，「自分は他者の役にたつのか」という中心的テーマをもち，他者の成長や自己実現への援助へ向けて方向づけられる。そして，両者の特質として，先述した山本（1989）の Separated-self, Connected-self の特質が適用されている。

岡本（1997）によると，「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」は，相互に影響を及ぼし合い，深い関連をもっている。たとえば，他者の成長や自己実現ができるためには，「個としてのアイデンティティ」が達成されていることが前提である。一方，「関係性にもとづくアイデンティティ」を達成することにより，生活や人生のさまざまな局面に対応できる力，危機対応力，自我の柔軟性・しなやかさが獲得される（岡本，1997）。

(5)杉村が述べる相互調整のプロセスとしての「関係性」

杉村（1998，2005）は，アイデンティティを，自己の視点に気付き，他者の視点を内在化すると同時に，そこで生じる両者の視点の食い違いを相互調整によって解決するプロセスであるととらえ直した。そして，アイデンティティ探求の実際の作業である「探求」は，人生の重要な選択を決定するために，他者を考慮したり，利用したり，他者と交渉することにより問題解決していくことであると定義している（杉村，1998，2005）。このように，青年期におけるアイデンティティ形成においては，杉村（2005）は，「青年の他者との関係のあり方がアイデンティティの重要な指標であるというパラダイムを持つことが必要」であると述べている。

ここまで，アイデンティティにおける他者との「関係性」の観点を強調した理論的研究を概観した。しかし，これらのアイデンティティにおける他者との「関係性」の観点を強調した理論的研究は，成熟したアイデンティティのとらえ方について研究者間で見解の相違があるように思われる。すなわち，Josselson（1992）や杉村（1999）は，個としてのアイデンティティは関係性の中に包含され，関係性の中から現れるととらえており，一方，岡本（1997）は「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」のバランスと統合が，成人期のアイデンティティの成熟した様態であるというスタンスに立っている。そして，これは個体化と愛着の経路を提唱した Franz & White（1985）に近い考え方であるかもしれない（岡本，2002）。この見解の相違に関して，筆者は，「関係性」の次元の相違による「個」と「関係性」のかかわり方の相違ではないかと考える。つまり，「個」を確立するための「関係性」と，「個」が確立したのちに発揮される「関係性」というように，「関係性」のさまざまな次元を考慮する必要がある。そしてこれは，アイデンティティが形成される青年期までと，アイデンティティが形成されたのち，つまり，成人期以降の「関係性」の相違ではないかと考えられる。

3.「個」と「関係性」からみたアイデンティティの最近の研究課題

最近の研究課題として，「関係性」の次元—個体内関係性と社会的関係性—をとらえる必要性が挙げられる。「関係性」にはさまざまな次元があり，それらを詳しく検討する必要がある。すなわち，自我形成のための「関係性」，自我形成ののち，青年期にアイデンティティを形成するまでの「関係性」，そして，アイデンティティが確立されてから，他者のアイデンティティ形成を援助するための「関係性」といった，さまざまな次元である。幼児後期までの自我形成のための「関係性」つまり，個体内関係性は，自我が形成され，具体的重要な他者と社会的な関係を持つ幼児後期までに形成される「関係性」である。個体内関係性は，Josselson の「関係性」の次元でいう，最初の 4 次元（抱きかかえ，愛着，熱情的体験，目と目による確認）であるといえるだろう。そして，個体内関係性の上に積み上げられるのが社会的関係性であり，Josselson の理論で説明すれば，後の 4 次元（同一化，相互性，埋め込み，慈しみ・ケア）であるといえる。しかし，Josselson のいう慈しみ・ケアは，青年期まで—つまり，アイデンティティを獲得するまで—と成人期以降では質が異なることが推測され，両者を別個に考える必要があるのではないであろうか（宗田・岡本，2006a）。この点について，理論の精緻化と実証的研究の裏付けが求められるところである。

先述したように，ここまで概観してきた，成熟したアイデンティティのとらえ方についての見解の相違を，筆者は「関係性」の次元により説明できると考える。すなわち，アイデンティティが「関係性」の中に包含されるというとらえ方（例えば，杉村，1998）は，「関係性」の発達を通してのアイデンティティの発達という点で，より心理的・個体内的次元における「関係性」を述べているととらえることができる。一方で，「個」と「関係性」が 2 つの軸として発達するものであるというとらえ方（例えば，岡本，1997）は，「自分は他者の役に立つのか（岡本，1997）」といった発達の方向性が示されていることから，より社会的次元の「関係性」としてとらえられる（宗田・岡本，2005b）。さらに，発達早期の「関係性」の次元，すなわち，自我形成のための「関係性」をとらえる必要性がある（宗田・岡本，2006a）。つまり，社会的次元の「関係性」を支えている個体内関係性である。この個体内関係性を十分に築くことが，のちのアイデンティティ発達にとって重要であると思われる。そして，社会的関係性に関しては，発達段階を考慮すること，すなわち，青年期のアイデンティティを獲得するための「関係性」，成人期以降に次世代のアイデンティティ形成の援助として発揮される「関係性」といった次元を，さらに詳細にとらえることが必要である。

一方，これまで概観したアイデンティティの理論的研究において，「個」は，長年，アイデンティティ研究の中で扱われてきたように，「自分は誰であるのか」という発達の方向性をもち，分離-個体化の発達，自律的行動，自己と他者の不可侵性を特徴としているところは，研究者間で共通しているであろう。それでは，「個」は，どこから生じ，どこへ向かっていくのであろうか。Stern（1985 小此木他訳　1989，1991）の理論によれば，乳児は生まれたときから主観的体験を有しており，それが「個」の起源であると考えられる。

このように，「個」と「関係性」からアイデンティティをとらえること，特に，「関係性」の次元をとらえることは，アイデンティティ論からみた心理臨床学的援助への道標となる。つまり，アイデンティティの危機にあるクライエントに対して心理臨床学的援助を行う際，どの発達段階におけ

るどの次元の「関係性」に問題があるのかという視点をもつことができる。発達早期あるいはそれ以後に重要な他者との間に十分にあたたかい関係を築くことが困難であった場合は，セラピストがクライエントに対し，十分にあたたかい体験をもてるように懸命に努力する必要がある。

ここでは，Josselson と Stern の理論をとりあげたが，さらに，アイデンティティを「個」と「関係性」からとらえるために，「個」と「関係性」についての具体的な説明が求められる。そこで次に，Josselson と Stern の理論を含め，主に早期（母子）関係論を概観し，「個」と「関係性」の起源について考察する。

「個」と「関係性」の起源

1．精神分析学における早期母子関係論

(1)Freud の心理-性的発達論

Freud（1905　懸田他訳　1969）は，心理-性的な発達論を提唱した。すなわち，第 1 段階のきわめて早い時期における口唇愛，「前性器的」組織化の第 2 の段階，サディズムと肛門愛，そして，（小児の場合には男根が首位をしめるところまで発達するだけであるが）第 3 段階の男根期，性生活が本来の性器領域の関与による規定を受ける時期を経て小児性欲は発達する。

口唇期，肛門期，男根期という発達論は，「個体の欲求充足を縦糸とし，この欲求充足にかかわる他者たちとの生活を横糸として織り成されるもの（鯨岡，1999)」である。つまり，（心理-性的，もしくは，生物学的）個体と他者（母親，父親）との関係の両者を含んだ発達論であるといえる。

(2)Winnicott の「親と幼児の関係に関する理論」

Winnicott（1965　牛島訳　1977）は，「親と幼児の関係に関する理論」の中で，幼児の絶対的依存と母親の母性的共感にもとづいた育児について述べている。すなわち，幼児（乳児期初期）の絶対的依存の段階にいる幼児は，自我を支える母親の育児に助けられてはじめて生き，そして成長できるのである。絶対的依存段階にある幼児の欲求と母親の適切な育児が結びつくときに，「抱っこ」が生じる。この「抱っこ」は，「共に生きる」という概念が幼児にできあがる前に環境から与えられるすべての供給を意味している。「物理的侵害からの防護，幼児の皮膚の感受性―触覚・温覚，聴覚の感受性，視角の感受性，落下に対する感受性（重力の感覚）と自己以外のものの存在に対する幼児の無知とに対する配慮」である。これは母親の愛情表現であり，これによって幼児は，生理的欲求の満足，そして，信頼性の芽生えを獲得する。この段階の健康な情緒発達では，（母親の適切な育児がつづくことにもとづき）自我は未統合の状態から構造化された統合へと変革する，つまり，幼児はひとりの人間，正当な自らの権利をもった個人となる（「精神が身体に住みつく」)。

幼児の自我は脆弱であるが，実際は育児による自我の支持によって，幼児の自我は強くなっている。そのため，母親の満足な育児を体験することができない幼児は，自我の強さの礎石となる存在の連続性は中断され，自我の脆弱化を残すことになる（Winnicott，1965　牛島訳　1977)。

Winnicott（1965　牛島訳　1977）は，乳幼児の自我の強さが「抱っこ」により育つことを述べており，「抱っこ」は乳幼児にとって，個体内関係性の経験であるといえる。この経験を十分にもつ

ことで，アイデンティティの核となる自己存在の連続性や一貫性が育つといえる。

(3)Mahler et al.の分離-個体化発達の理論

Mahler, Pine, & Bergman（1975　高橋他訳　2001）は，乳幼児の心理的世界について言及した分離－個体化理論を展開した。これは，乳児が母から次第に分離していくプロセスをとらえたものである。そのプロセスは，正常な自閉期，正常な共生期，そして分離-個体化期とつづく。分離-個体化期には，分化期，練習期，再接近期，個体化期の下位段階がある。

正常な自閉段階は，子宮外生活の最初の2～3週間における，母親を認識しない一時的ナルチシズム期である。この自閉段階における課題は，新しい胎外の環境で優勢な身体精神的，生理的メカニズムによって，恒常的平衡状態を達成することである。2か月目以降，欲求充足対象をぼんやり意識することによって，正常な共生段階の始まりが特徴づけられる。しかしこの段階では，乳児は，あたかも自分と母親が一つの全能の組織――一つの共通した境界を持つ二者単一体―であるかのように行動し，機能する。乳児の母親に対する欲求は絶対的なものである。「我　I」は「我でないもの not　I」からまだ分化されていない。共生の本質的特徴は，母親表象との幻覚的，もしくは妄想的な＜全能感にみちた＞身体精神的融合である。正常な共生期において，乳児の内部感覚は自己の「核」を形成し，「自己感」の中心的結晶体の点として残る。そしてその周辺に「同一性の感覚」が確立されるようになる。

生後4～5か月頃，分離-個体化過程の第1下位段階，＜分化＞の始まりがみられる。生後6か月目に，分離-個体化における試験的試み―母親の髪などをひっぱること―が始まる。生後6～7か月にかけて，母親の探索が行われ，馴染みのないものを馴染みのあるものと照合する認知機能へと発展する。7～8か月頃から「母親の照合」という視覚様式がみられる。赤ん坊は母親と違ったように，あるいは同じように，見えたり，感じられたり，動いたりする他の人々，あるいは〈もの〉と母親を区別し始める。分化期は練習期と重なっており，練習期は，初期練習期―這う，よじ登るなどして，母親から身体的に離れようとする最も初期の能力―と本来の練習期―自由な直立歩行―によって特徴づけられる。母親からの急速な〈身体的分化〉；母親との〈特殊な結びつき〉の確立；〈母親にきわめて近い自律的自我装置の成長と機能〉の発達が分離と個体化へ向けての要因となる。

生後1歳半頃までに，幼児はヨチヨチ歩きの子どもになり，身体的分離を意識する。そして，分離不安の増大がみられる。練習期の間に停滞していた，親密さへの欲求をもつようになるため，再接近期と名づけられる。この段階では，母親の最適な情緒的有効性がきわめて重要である。15か月～24か月の間，親密な身体接触を求めたり，あるいは回避したりする。幼児と母親との相互作用―象徴的言語，発声，象徴的遊び―が次第に顕著となる。

最後の下位段階，（ほぼ3年目）では，明確な個体性の達成，および，対象恒常性のある程度の達成がみられる。対象恒常性は，一貫した母親の内的表象を次第に内化することによって確立される。対象恒常性の重要な決定因は，①共生段階において，欲求充足する者によっていつも緊張が解消されることによる信頼と確信，②永続的対象である母親を共生的内的表象として認識的に獲得することである。この段階は重要な精神内発達の時期であり，この過程において確固とした実体感（自己境界）が達成される。そして，対象表象から明確に分離したものとしての自己の心的表象を確立す

ることによって，アイデンティティ形成への<道が開かれる>といえる（Mahler et al.，1975　高橋他訳　2001）。

このように，Mahler et al.（1975　高橋他訳　2001）は，乳幼児が母親から分離していくプロセスを記述している。ただ，正常な自閉期に関しては，次に述べる Stern の指摘を受けて，のちに Mahler 自身が見解をあらためている。すなわち，正常な自閉期はないこと，そして，誕生後 2～3 週間を目覚めの時期としてとらえたことである（Mahler & McDevitt，1982）。近年の乳幼児研究では，乳幼児が生まれたときから自己感を有することが明らかにされている。この自己感（あるいは，核）は，アイデンティティの中核をなすものである。

(4)Stern の自己感に関する理論

Stern（1985　小此木他訳　1989，1991）は，乳児の社会生活における主観的体験として自己感の役割について述べている。自己感とは，社会的体験をオーガナイズするもっとも主観的な見通しとしての役割を果たしている。そして，自己感の獲得が，社会的体験における発達上の大きな変化を起こす。主観的オーガナイゼーションとは，自分の体験を本能的に加工処理するものであり，これを促す主観的体験こそ，言葉をもつ以前に存在する自己である。

Stern（1985　小此木他訳　1989，1991）は，4 つの異なった自己感，新生自己感（出生後～2 か月），中核自己感（2～6 か月），主観的自己感（7～15 か月），そしてそれ以後に形成する言語自己感について述べている。これらの自己感は継続的なものではなく，ひとたび形成されたら一生涯機能し続け，活発であり続ける。以下，自己感について述べる。

新生自己感の性質は，新生されつつあるオーガナイゼーションの体験であり，最初は身体と関連している。身体の融和性，動作，内的感情状態，それらすべての記憶など，一つひとつの体験間の関連性や不変要素を同定し，それらのネットワークを作る過程である。

中核自己感は対人世界をつくり出すもので，個の人間としてのまとまりの感覚である。乳児は，他者（母親）と自分は別個の存在である（分離－個体化）ことを学ぶと同時に，自分が他者と共にあることも学ぶ。乳児には統合された自己感，他者感をもつ能力があり，対人世界を作るのにまず取り組む作業は，中核自己感，中核他者感の形成である。乳児にとっての社交上の重要な体験は，誰かと共にあることという実際上の体験そのものであり，その体験の結果，自己－感情は重大な変化を遂げる。

主観的自己感の領域では，乳児は，心の“主題”が自分以外の誰かと共有可能であると認識する。自分とは別の他者も自分と似たような精神状態を持つのだという主観的体験をもち，間主観性を体験する。対人間の活動は，目に見える活動や反応から，行動の背景にある内的主観状態（感情，動機，意図など）へと移り，この移動を通して乳児は，今までとは違った“存在”と社会“感覚”を体験するようになる。間主観的かかわり合いにおいて最もよく見られるのは，情動状態の共有である。それは模倣を越え，情動調律という行動カテゴリーへと発展する。情動調律とは，内的状態の行動による表現形をそのまま模倣することなしに，共有された情動状態がどんな性質のものか表現する行動をとることである。意識されることなく，自動的に起こる独立した情動交流法である。

言語自己感の領域では，自己感と他者感は新しい属性を獲得する。言語という新しい交流手段を

得て，他者と“共にある”あり方が広がる。言語の発達にともない，乳児は，自己を客観視する，象徴を用いる，願望を抱くなどの能力を獲得する。これにともない，乳児の総括的体験は，その一断片のみが言語化され，その他の部分は潜行していくため，二つの体験間にずれが生じ，これが無意識を生み，神経症発症の素地となっていく（Stern，1985　小此木他訳　1989，1991）。

以上のように，乳児は新しい自己感を得る中で外界，他者，社会とかかわり合い，そのかかわり合いを通して自己感を発達させていくと思われる。Stern（1985　小此木他訳　1989，1991）によると，自己と他者の主観的一体感は，他者と共にある自己としての健康な体験を統合したことによる望ましい結果である。つまり，乳児は生まれたときから個として存在するといえる。鑪（1994，2002）によると，Stern（1985　小此木他訳　1989，1991）のいう自己感は，アイデンティティの基底を考えるうえで興味深く，重要なものである。すなわち，Stern（1985　小此木他訳　1989，1991）は，乳幼児が早期の母子関係の融合の中から分化するのではなく，初めから分離して「共にあるもの」として体験されるものが成熟発展するという観察を行っており，そこには，自己および他者がそれぞれ単一で一貫性があり，境界をもった身体的存在であることを規定する対人関係上の体験に不変の部分がなければならないことを前提とするという，アイデンティティのテーマがすでに展開されている（鑪，1994，2002）。

2．アイデンティティ論における「個」と「関係性」の起源

(1) Franz & White の「生涯発達に関する複線（two-path）モデル」

Franz & White（1985）の述べる発達の複線モデルは，対象関係論（McDevitt & Mahler，1980；Mahler & McDevitt，1980）と対人関係的コンピテンスに関する研究（Selman，1981）から主に説明されている。以下，彼女らの述べる複線モデルについて，主に乳幼児期を中心に述べる。

乳児期（0～16 か月）では，個の危機と同じように，愛着の危機は，「信頼　対　不信」である。Erikson と対象関係論の理論家が共通して述べるように，この時期は愛着の発生とアイデンティティ形成の根がみられる時期であり，親と子どもの接近した安全な関係が重要である。幼児前期（17～36 か月）では，個の経路は，「自律性　対　恥・疑惑」である。これに対応して，対象関係論では，自己と対象の恒常性の課題が提示されている。対象恒常性は，以下のことを意味する。すなわち，(a)母性の表現への原始的・積極的な愛着，(b)母性の表現としての「よい」，「悪い」（「信頼できる」，「信頼できない」を含む）の構成要素の統合，そして(c)実際の母親が利用可能であることと同様に，精神的に子どもに利用可能な母性表象を達成させること（McDevitt & Mahler，1980）。このように，愛着の経路の第 2 段階は，対象恒常性の危機である。幼児後期（Erikson 理論の「自主性　対　罪悪感」）になると，子どもの相互関係の能力（Selman，1981）が発達する。これにともない，子どもは，他の人が思考し，感じ，そして自分自身からの分離を意図するということが理解できるようになる。この時期の愛着の危機は，「遊戯性　対　受身性または攻撃性」の能力である。学童期（6～12 歳，Erikson の第 4 段階「勤勉性 対 劣等感」）では，愛着経路は，「共感と協力　対　過度の警戒または権力」である。子どもは，他者の主観的経験が自身のものとは異なっていることを知るようになり，他者を自律的なものとして見る新たな能力が加わる。このように，相互性，共感，

関心の能力が発現する時期である。青年期（Erikson の第 5 段階「アイデンティティ達成　対　アイデンティティ拡散」）には，青年は，(a)交渉を促進できる，(b)広範囲の情緒を統制できる，(c)ギブ・アンド・テイクができる，(d)正確な知覚，共感的理解，そして自己と他者の感情にもとづいて行動をとることができるようになる。このように，青年期の愛着の危機のレベルは，「相互性・相互依存　対　孤立」である。成人前期・中期は，先述したように，Erikson の心理社会的段階の課題（「親密性　対　孤立，世代性　対　自己陶酔）が愛着の経路である。一方，個体化経路の成人前期の課題は，「職業及びライフスタイルの模索　対　漂流」，成人中期の課題は，「ライフスタイルの確立　対　空虚」となっている。そして，老年期は，個体化経路と愛着経路の両者に「統合性　対　絶望」の課題が設定されている（Franz, & White, 1985）。

(2)Josselson の「関係性」発達の 8 次元に関する理論

Josselson（1992, 1994）が述べた「関係性」発達の 8 次元について述べる。

①抱きかかえ（holding）―最初の人間相互の体験であり，安全と基本的信頼を表す。他者に含まれていることを体験する，つまり，力強い腕が落ちないように守ってくれることを体験することである。人間は，成長するためには，包まれ，制限され，根付き続ける必要がある。これは，Winnicott によって大きく探求された「関係性」の側面であるといえる。自分のまわりに腕があり，支えられているという発達初期の経験―十分に抱きかかえられる経験をした人は，生きていくことに自信を感じ，基本的欲求が叶えられることを期待し，世界が自分を落とすことはないだろうということを予測するようになる。この次元のアイデンティティ拡散は，落ちること（falling）への恐怖である。②愛着（attachment）―乳児は，自分の母親を，他の周りの人と区別することを学び，この一人のとても特別な他者（母親）と愛着をつくることが可能になる。愛着は抱きかかえとは違って，外部の対象に要求するものである。分離-個体化を重視すると，愛着，特に両親との愛着は分離-個体化過程の失敗としてみなされそうであるが，両親への愛着は人生を通して持続するものである。人生を通して，愛着は探求から帰った時の安全基地として用いられる。また，情動と温かさの感覚を維持することを通して人生は豊かなものとなる。Bowlby（1969　黒田他訳　1991）が述べるように，愛着は母親的人物へもっとも接近した状態を保持するような本能的行動，他のひとりの特殊な個人に対する基本的な表現である。③熱情的な体験（passionate experience）―人生が始まったときから，基本的で生物学的な動因は，満足感を捜し求める。乳児にとって，吸い付きへの欲求―リビドーの初期の形―である。ここでは，熱情的な経験の領域において，他者が動因充足の対象となる。この，喜びを求めるという方向性は，人生を通して，様々な水準において経験される。動因を通して他者と接近することは，熱情的な関係の様式である。つまり，性的結びつき，あるいはその象徴的な表現を通して，（自己と他者の）分かれている空間を克服する。激しい体験，情緒的に満たされる体験，快感を通しての他者との結びつきである。④目と目による確認（eye-to-eye validation）―他者に対して重要であるという感覚，存在することの必要性を，目と目のコンタクトによって経験することである。目と目による関係では，他者の目の中に自己を見つけ，他者の中に居場所を見つける。つまり，アイ・コンタクトによるコミュニケーションを通して，空間を埋め合わせる。他者の中に存在することにより，そして，他者のために存在することにより，関係をもつということで

ある。他者を「他者」として認識できるようになるにつれ，私たちは他者を自分自身を知るための鏡として使い始める。幼児が母親の目の中に初めて見るものは，幼児の自己感覚のもととなるものを形成する。⑤理想化と同一化（idealization and identification）—この「他者」の世界の中でしばらく存在した後，自分自身よりも，物事を可能にすることができる他者がいることに気づき始める。どのように，そして何になるかのモデルを準備するために他者を見ること，他者を同一視することである。理想化と同一化は，能力のある他者とつながる方法であり，その人のようになるための努力（あるいは，その他者をコントロールするための努力）である。⑥相互性（mutuality）—人が幼児期を通して成長し，そして，自我が十分に発達し，より他者について気づくようになるにつれ，子どもは自己が他者に従事する可能性を発見し，相互性という形式の仲間づきあいを経験できるようになる。相互性では，人は誰かと並行して立ち，協調的に行動し，両者の産物であるきずな—「私たち」の間にある空間に出現するもの—を生み出す。⑦埋め込み（embededness）—他者と共に存在する場所をみつけ，得ること，つまり，所属することである。社会的存在としての「関係性」であり，青年期のアイデンティティ形成の中心課題である。埋め込みは，抱きかかえや愛着のような活動的なものというよりむしろ静かなものである。⑧慈しみ・ケア（tending and care）—人は発達する中で，他者をケアすることについて学び，他者の要求に自己を提供し，慈しみ・ケアを通して（自己と他者の）空間を橋渡しする。慈しみとは，（実際に，あるいは象徴的に）他者を抱きかかえ，腕の中であやすことである（Josselson，1992，1994）。

以上，Josselson（1992，1994）が述べた「関係性」の次元を整理した。ただ，8番目の次元，慈しみ・ケアという「関係性」は，アイデンティティが形成される青年期以前と成人期以降では，例えば，他者を思いやることによる自己確認や，実際の後進の育成や子育てというように，慈しみ・ケアの次元を区別して考えることが適切であると思われる。

3.「個」と「関係性」からみたアイデンティティ生涯発達のまとめ

以上，早期母子関係論，および，アイデンティティ論を中心に「個」と「関係性」の起源と考えられる理論を概観した。これらをまとめたものが図1である。図中の概念は，これまで述べてきた概念に相当する。図中央にはErikson による発達段階，Freud による心理·性的段階，図左に「個としてのアイデンティティ」，図右に「関係性にもとづくアイデンティティ」の発達を記述した。本稿では，発達早期の「個」と「関係性」に主に焦点をあてて以下に論じる。

「関係性にもとづくアイデンティティ」を個体内関係性と社会的関係性という次元により整理する必要がある。個体内関係性は幼児後期までの自我形成のための「関係性」である。Winnicott（1965 牛島訳　1977）の述べるように，乳幼児の欲求と母親の適切な育児が結びつくときに「抱っこ（抱きかかえ）」が生じ，それにより乳幼児の自我が未統合な状態から統合された状態へと変革するのである。Erikson が乳児期の課題としている基本的信頼感と，抱きかかえ，目と目の確認，熱情的な体験，愛着といった「関係性」の次元は，密接に関連しているであろう。Erikson が基本的信頼感を，他者から「得ること」を学ぶことで能動的な取り込み様式が成熟すると説明していることからも，他者との十分な個体内関係性の経験により自己信頼が可能になるといえるかもしれない。

個としてのアイデンティティ						関係性にもとづくアイデンティティ			
Mahler	Stern	Franz & White	Erikson	発達段階	Freud	Franz & White	Stern	Winnicott/Bowlby/Josselson/岡本	
正常な自閉期	新生自己感	基本的信頼感	基本的信頼 対 不信	乳児期	口唇-呼吸器的,感覚-筋肉的	基本的信頼感 (他者信頼 対 不信)	新生他者感	抱きかかえ	個体内関係性
正常な共生期(1〜2月)	中核自己感 (2〜3か月)	(自己信頼 対 不信)					中核他者感 (2〜3か月)	愛着	
分化期(4〜5月)								熱情的体験	
	主観的自己感 (7〜9月)						主観的他者感 (7〜9月)	目と目の確認	
練習期: 早期練習期 (8月〜)									
練習期: 固有の練習期 (10〜12月)									
分離・個体化期: 再接近期 (15〜25月)	言語自己感 (15月〜)	自律性 対 恥・疑惑	自律性 対 恥・疑惑	幼児前期	肛門-尿道的,筋肉的	対象および自己の恒常性 対 孤独・無力感	言語他者感 (15月〜)		
分離・個体化期: 個体化期 (25〜36月)								同一化	社会的関係性
		自主性 対 罪悪感	自主性 対 罪悪感	幼児後期	幼児的-性器的	遊戯性 対 受身性または攻撃性		相互性	
情緒的対象恒常性								埋め込み	
		勤勉性 対 劣等感	勤勉性 対 劣等感	学童期	"潜伏期"	共感と協力 対 過度の警戒または権力		慈しみ・ケア	
		アイデンティティ達成 対 アイデンティティ拡散	アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散	青年期	思春期	相互性・相互依存 対 疎外			
		職業及びライフスタイルの模索 対 漂流	親密性 対 孤独	成人前期	性器期	親密性 対 孤独		慈しみ・ケア (成人期以降)	
		ライフスタイルの確立 対 空虚	世代性 対 停滞	成人中期		世代性 対 自己陶酔			
		統合性 対 絶望	統合性 対 絶望	老年期		統合性 対 絶望			

図1 「個」の発達と「関係性」の発達に関する理論

幼児前期に関して，Franz & White（1985）は，愛着―「関係性」―の経路として，対象恒常性を課題としている。つまり，母性表象の達成がおこり，それが「自律性，個体化，自己一貫性，自己の凝集性」といった「個」の課題と結びつく（あるいは，影響する）といえる。これは，Stern（1985 小此木他訳　1989，1991）が述べる言語他者感の獲得―言語の発達にともなう，自己の客観視，象徴の使用，願望を抱く能力の獲得―からも裏づけられる。

次に，幼児後期までの「個」の経路を検討する。Stern（1985　小此木他訳　1989，1991）は，乳児が初めから分離して存在し，主観的体験という自己を持っていることを明らかにしており，これが「個」の起源であると思われる。先述したように，鑪（2002）はアイデンティティのテーマ―自己存在における一貫性，発動性，連続性―がStern（1985　小此木他訳　1989，1991）のいう中核自己感の発現の中にすべて展開されていると述べる。このように，自己感―社会的体験を処理する主観的体験―こそが「個としてのアイデンティティ」の起源である。さらに，中核自己感が形成された後，Mahler et al.（1975　高橋他訳　2001）の述べる分離-個体化期が始まり，ここに「個としてのアイデンティティ」の発達過程が展開されている。母親からの分離過程は，乳幼児が形成した中核自己感（個の人間としてのまとまりの感覚）と中核他者感（誰かと共にあるという経験）が，他者と共にある経験の発達として展開されるのである。すなわち，自分でないもの（母親）を認識し（分化期），母親との物理的分離を経験する（練習期），そして，母親から分離不安を感じ，親密さへの欲求が増すなかで，母親との最適距離をつかみ（再接近期），個体性（アイデンティティの感覚）をつかむ（個体化期）のである。このように，Mahler et al.（1975　高橋他訳　2001）の分離-個体化発達の過程は，母親との「関係性」の中で，乳幼児が「個としてのアイデンティティ」の感覚をつかんでいく発達の過程を鮮やかに記述しているといえる。

そして，この「個としてのアイデンティティ」の感覚の発達の基礎には，子どもの「関係性」（早期における母親との関係）があることを忘れてはならない（鑪，1994）。つまり，Stern（1985　小此木他訳　1989，1991）が述べるように，4つの自己感には，それぞれ4つの他者感が存在するのである。さらに，図1に示すように，基本的他者信頼感，抱きかかえ，目と目の確認，熱情的体験，愛着といった個体内関係性が，乳幼児が「個としてのアイデンティティ」の感覚を発達させる基盤となっている。

このように，見落とされてはいけないことが，個体内関係性の発達である。Josselson（1992，1994）の述べるように，青年期においては，両親との愛着は分離-個体化過程の失敗としてみなされそうであるが，両親への愛着は人生を通して持続するものである。岡本（1985，1994）は，Mahler et al（1975　高橋他訳　2001）の述べた分離-個体化のプロセスが，青年期，中年期，現役引退期といったライフ・ステージにおいても観察される，ライフサイクルにおける発達的危機期のプロセスであることを示している。この危機をのりこえるための要因として他者との「関係性」が重視されることは述べるまでもない。

さて，発達早期の個体内関係性の体験と自我形成が，のちのアイデンティティにとって重要であることに触れておきたい。鑪（1994，2002）が述べるように，「乳幼児期における中核自己感の形成が，子どもにとって途方もない大きな課題」であり，「これらの困難な課題は，またそのまま思春

期，青年期のアイデンティティの形成の中核的テーマとして作動し，成人期，中年期，老年期と繰り返し展開され，ライフサイクル全般の心理社会的な変容過程の危機として存在している」ことは，岡本（1985，1994）の知見を支持するものである。この見解の図式化は，本稿の課題といえるが，発達早期の自我形成が，発達的危機とその解決にかかわっていることに関しては，今後の重要な検討課題である（この点については，次の2で言及する）。

「個」と「関係性」からみたアイデンティティの実証的研究

1.「個」と「関係性」からみたアイデンティティに関する実証的研究

「個」と「関係性」からみたアイデンティティに関する実証研究は，Gilligan（1982　岩男　1986）をもとに検討した山本（1989）以来，ほとんどみられない。現在，「個」と「関係性」と銘打った研究が行われているのは，筆者の知るかぎり，広島大学のみである。今後，「個」と「関係性」からみたアイデンティティの実証的研究が積み上げられることを期待したい。ここでは，「個」と「関係性」からみたアイデンティティを検討した，最近の実証的研究を概観し，今後の課題を展望する。

山本（1989）は，Gilligan（1982　岩男訳　1986）の述べた「自己」の二面性についての実証的研究は必ずしも多くなく，発達的にどの様に変化し，また，男女でその様相がどのように異なっているかという点について，青年期以降成人期を通じた実証的な研究はほとんど見られないことを指摘した。そして，青年期から成人期までの男女を対象に，Separated な側面，Connected な側面として表わされる「自己」の二側面を意識の面から測定する尺度（S 尺度，C 尺度）を構成した。S 尺度は，「自己主張の強さ」，「他者・状況からの分離性」，「自由な自己表出」の3因子で構成された。C 尺度は，「他者欲求への敏感さとその充足の優先」，「社会的能動性」，「共感・融合能力」の3因子で構成された。

先述したように，岡本（1997）は，山本（1989）の述べた Separated-self と Connected-self を「個としてのアイデンティティ」，「関係性にもとづくアイデンティティ」として示している。しかし，山本（1989）の S 尺度，C 尺度が，「個としてのアイデンティティ」，「関係性にもとづくアイデンティティ」を測定できる尺度であるかどうかについては，項目表現や妥当性の点で問題点がある。宗田・岡本（2005a，2005b）はこの問題を考慮し，「個」と「関係性」を測定する尺度の作成を試みた。その結果，まず，信頼性と妥当性の確認できた「個としてのアイデンティティ」を測定する尺度が作成された。「個」尺度は，内的整合性と安定性の観点からの信頼性が確認され，また，因子的妥当性が確認された点で，S 尺度（山本，1989）と比較して，より精度の高い「個としてのアイデンティティ」を測定する尺度である。さらに，「個」尺度得点が，女性より男性に有意に高いこと，また，大学院生より大学生の得点が有意に高いことが明らかになった。「個」の構成概念を検討するために Big Five 尺度との関連を検討したところ，情緒不安定性と負の関連を持つことが示唆された。「関係性」―心理的・個体内的次元の「関係性」と「関係性にもとづくアイデンティティ」―を測定する尺度（「関係性」尺度）の作成の試みでは，全体尺度の信頼性と妥当性が示唆された。「関係性」尺度全体得点が男性より女性に有意に高いことが示唆された。また，Big Five 尺度との

関連からは，外向性，誠実性，調和性と正の関連をもつことが示唆された。このことから，「個」は男性に優位に，「関係性」は女性に優位にみられる概念であること，および，「個」は情緒不安定性と関わり，「関係性」は外向性，誠実性，調和性と関わるという構成概念が示唆された（宗田・岡本，2005b）。しかし，大野（2006），宗田・岡本（2006a），高村（2006）が指摘するように，「個」と「関係性」の定義に関する問題，および，尺度作成上の諸問題がみられ，標準化は今後の課題である。

山田・岡本（2006a）は，Franz & White（1985）の複線モデルをもとに，「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」を測定する尺度作成を行った。その結果，「個としてのアイデンティティ」3 因子―自己への信頼感・効力感，将来展望，自律性―，「関係性にもとづくアイデンティティ」3 因子―周囲への信頼感と関係性の価値づけ，孤独感のなさ，自己主張―が抽出された。さらにクラスタ分析をおこなったところ，得られた 4 クラスタは，自己の活動的な面と，情緒的な面の 2 軸から説明された。さらに，山田・岡本（2006b）は，類型化された 4 群（古典的，成熟，関わり困難，現代的）について，青年期を対象とした半構造化面接を行った。その結果，全群に共通して「他者への信頼感―友人や尊敬する他者への肯定的な感情」と「自他の融合の希求―他者との関係の中で自己を確立する試み」に関する語りが見られた。

山田・岡本（2006a）が作成した尺度は，Franz & White（1985）を定義としているものの，得られた因子が 8 段階すべてを反映しているとは言い難い。これは青年期を対象としたことによる問題といえるかもしれない。また，クラスタ分析を行ったところ，「個」と「関係性」の 2 軸からではなく，活動面と情緒面の 2 軸が見出された結果は，現代青年におけるアイデンティティが，「個」と「関係性」のバランスがとれた成熟したアイデンティティへと発達する過程を示唆する貴重な知見である。

以上のように，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ実証的研究を概観すると，図 1 に示した「個」と「関係性」の起源のうち，質問紙尺度でとらえられている範囲は限られている。今後は，質問項目の精緻化とともに，図 1 に示したように，「関係性」の枠組み―個体内関係性と社会的関係性―をとらえることで，「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」がどのように影響し合うかについての検討が必要である。すなわち，個体内関係性が「個としてのアイデンティティ」の基盤となることに関する実証が必要であるとともに，青年期以降のアイデンティティ発達・変容における「関係性」の側面を実証的に整理することが必要である。

さらに，尺度を用いた数量的研究に加え，質的検討が求められる。山田・岡本（2006b）のように，尺度を用いて類型化を行い，各類型の語りを分析することは，方法論として参考になる。類型化に関しては，アイデンティティ得点の高低，あるいは，「個」と「関係性」の得点のバランスといった類型化，さらに，アイデンティティ研究にとって欠くことのできない Marcia（1966）のステイタス法による類型化など，さまざまな方法がありうる。質的検討に関しては，半構造化面接や投影法など，議論の余地がある部分であると思われるので，これについて論じることは，今後の課題としたい。

2. 発達早期の自我形成がのちのアイデンティティ形成に及ぼす影響，および，青年期のアイデンティティが成人期のアイデンティティに及ぼす影響

近年のアイデンティティ研究の関心は，アイデンティティの発達経路，つまり，発達早期の自我形成が，のちのアイデンティティ形成に及ぼす影響，さらに，青年期のアイデンティティが成人期の「アイデンティティ再体制化（岡本，1985）」に及ぼす影響にある（岡本，2002）。ここでは，この問題を検討した実証的研究を概観する。

岡本（1986）は，回想法を用い，青年期以降のアイデンティティ・ステイタスの発達・変化経路の分析を行った。その結果，青年期に獲得されたアイデンティティ・ステイタスは，以後の成人期に変化しうることが明らかになった。また，より成熟したステイタスへの変化は，危機を主体的に受けとめ，解決し得るか否かに関わっていることが示唆された。さらに，結果は，Waterman（1982）のモデルからほぼ説明可能であったが，青年期においてアイデンティティ達成型であった者が中年期において早期完了型（予定アイデンティティ）へ変化する可能性も示唆された。この知見は，青年期のアイデンティティ形成がどのように変化し，成人期におけるアイデンティティを規定するのかを示唆した重要なものである。

さらに，岡本（2002）は，発達早期の自我形成が，のちのアイデンティティ形成に及ぼす影響の検討が必要であると述べる。この問題を検討した研究に，青年期のアイデンティティ形成と乳幼児期の自我や対象関係の発達の特質との関連について検討した Kroger（1990）が挙げられる。彼女は早期記憶面接を行い，アイデンティティ・ステイタスと早期記憶の主題との関連を検討した。その結果，世界の見方として，5 つの主題が見出された。つまり，①関係性の切望，②重要な他者・親近な状況へ安全やサポートを求めること，③重要な他者や親近な状況から離れること，④重要な他者や外的世界に反して行動すること，⑤一人または重要な他者と満足して行動することである。アイデンティティ・ステイタスごとの早期記憶の主題は次の通りであった。つまり，アイデンティティ達成型は，予定アイデンティティよりも，「一人または重要な他者と満足して行動すること」が多くみられた。モラトリアム型は，達成型と予定アイデンティティに比べて，「重要な他者や親近な状況から離れること」が多くみられた。予定アイデンティティ型は他のステイタスに比べて，「重要な他者・親近な状況へ安全やサポートを求めること」が最も多くみられた。アイデンティティ拡散型は他のステイタスに比べて，「関係性の切望」が最も多くみられた。Kroger（1990）のこの結果は，早期記憶にあらわれた「関係性」の主題と現在のアイデンティティ・ステイタスの関連を示唆しており，幼児期までの自我形成と青年期のアイデンティティ形成との関連を裏付ける知見である（岡本，2002）。ただ，早期記憶面接では，意識的レベルのみの検討となるかもしれず，今後は，投影的レベルでの検討が必要である。例えば，対象関係の査定に適した TAT（Thematic Apperception Test）導入が有効である（宗田・岡本，2006b）。Franz & White（1985）が述べるように，Erikson の理論と対象関係論は，乳児期において，愛着の発生とアイデンティティ形成の根がみられることが特徴づけられるという点は共通している。また，Franz & White（1985）が幼児前期の愛着の経路（「関係性」）の課題としている，対象および自己の恒常性―「自律性，個体化，自己一貫性，自己の凝集性」と結びついた「愛する対象との親密な関係」―を査定するために TAT は有用と考えられる。

まとめ

本稿では，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ研究が展開される中で，発達早期における「個」と「関係性」の起源を考察する必要があることに着目し，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ生涯発達の基盤となる理論を概観した。これにもとづき，「個」と「関係性」からみたアイデンティティの実証的研究において，「関係性」の次元，すなわち，個体内関係性と社会的関係性をとらえる必要があることを提起した。今後は，「個」と「関係性」を測定する尺度の開発，面接法，投影法（例えば，TAT）などを用い，数量的・質的にアイデンティティを検討し，実証的証拠を提示すること，および，発達早期の自我形成がのちのアイデンティティに及ぼす影響を検討することが求められる。

引用文献

Bowlby,J.（1969）. *Attachment and loss, Vol.1 Attachment* London:The Hogarth Press
（ボウルビィ，J. 黒田実郎・大羽　蓁・岡田洋子・黒田聖一（訳）（1991）. 母子関係の理論 I 愛着行動　岩崎学術出版社）

Erikson,E.H.（1950）. *Childhood and Society.* New York：Norton.
（エリクソン，E. H. 仁科弥生（訳）（1977）. 幼児期と社会　みすず書房）

Erikson, E.H.（1959）. *Identity and the life cycle.* New York: International Universities Press.
（エリクソン，E. H. 小此木啓吾（訳）（1973）. 自我同一性　誠信書房）

Franz, C.E.,& White, K.M.（1985）. Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, 53, 224- 256.

Freud,S（1905）. 性欲論三篇
（フロイト，S. 懸田克躬・吉村博次（訳）（1969）. フロイト著作集V　人文書院　pp.7-94.）

Gilligan, C.（1982）. *In a different voice: Psychological theory and women's development.* Cambridge, MA：Harvard University Press.
（ギリガン，C. 岩男寿美子（監訳）（1986）. もうひとつの声―男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ　川島書店）

Josselson, R.L.（1992）. *The space between us: Exploring the dimensions of human relationships.* San Francisco: Jossey-bass.

Josselson, R.L.（1994）. Identity and Relatedness in Life Cycle. In H. A. Bosma (Ed.), *Identity and development: An Interdisciplinary approach.* Thousand Oaks: Sage. pp.81-102.

Kroger,J（1990）. Ego structuralization in late adolescence as seen through early memories and ego identity status *Journal of Adolescence,* 13, 65-77.

鯨岡　峻（1999）. 関係発達論の構築―間主観的アプローチによる　ミネルヴァ書房

Mahler,M.S.,& McDevitt,J.B.（1980）. The separation-individuation process and identity

formation. In Greenspan,S.I.,&Pollock,G.H. (Eds.). *The course of life:Psychoanalytic contributions toward understanding personality development,Vol.1.Infancy and early childhood.*National Institute of Mental Health.pp.395-406.

Mahler,M.S.,& McDevitt,J.B. (1982). Thoughts on the emergence of the sense of self, with particular emphasis on the body self *Journal of the American Psychoanalytic Association,* **30**, 827-848.

Mahler,M.S.,Pine,F. & Bergman,A. (1975). *The psychological birth of the human infant.* New York : Basic Books.
(マーラー, M. S., パイン, F. &バーグマン, A. 高橋雅士・織田正美・兵畑　紀 (訳) (2001). 乳幼児の心理的誕生　黎明書房)

Marcia, J.E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology,*3,551-558.

McDevitt,J.B., & Mahler,M.S. (1980). Object constancy,individuality,and internalization. In Greenspan,S.I.,&Pollock,G.H.(Eds.). *The course of life:Psychoanalytic contributions toward understanding personality development,Vol.1.Infancy and early childhood.*National Institute of Mental Health.pp.407-423.

岡本祐子 (1985). 中年期の自我同一性に関する研究　教育心理学研究, **33**, 295-306.

岡本祐子 (1986). 成人期における自我同一性ステイタスの発達経路の分析　教育心理学研究, **34**, 352-358.

岡本祐子 (1994). 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究　風間書房

岡本祐子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学　ナカニシヤ出版

岡本祐子 (1999a). 女性の生涯発達とアイデンティティ―背景と問題のありか　岡本祐子 (編著) 女性の生涯発達とアイデンティティ　北大路書房　i -vii.

岡本祐子 (編著) (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程　ミネルヴァ書房

岡本祐子 (2006).「個」と「関係性」から見た成人期のアイデンティティ発達・変容過程に関する研究　平成 15・16・17 年度文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書

岡本祐子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開―中年期の危機と心の深化―　ミネルヴァ書房

大野　久 (2006). アイデンティティ概念再考：個と関係性の観点から―宗田・岡本論文へのコメント　青年心理学研究, **18**, (印刷中)

Selman,R.L.(1981). The development of interpersonal competence: The role of understanding in conduct *Developmental review,* **1**, 401-422.

宗田直子・岡本祐子 (2005a). アイデンティティの成熟をとらえる際の「個」と「関係性」の概念についての一考察　日本青年心理学会第 13 回大会発表論文集, 42-45.

宗田直子・岡本祐子 (2005b). アイデンティティの発達をとらえる際の「個」と「関係性」の概念の検討―「個」尺度と「関係性」尺度作成の試み　青年心理学研究, **17**, 27-42.

宗田直子・岡本祐子（2006a）.「個」と「関係性」からアイデンティティをとらえる試み再々考―大野・高村コメントへのリプライ　青年心理学研究，18，（印刷中）

宗田直子・岡本祐子（2006b）.「個」と「関係性」からアイデンティティをとらえる方法論に関する検討―TAT（Thematic Apperception Test）を導入する試み　広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要，5，（印刷中）

Stern,D.N.（1985）. *The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology.* New York: Basic Books.
（スターン，D. N. 小此木啓吾・丸田俊彦（監訳）　神庭靖子・神庭重信（訳）（1989，1991）. 乳児の対人世界―理論編，臨床編　岩崎学術出版社）

杉村和美（1998）. 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し　発達心理学研究，9，45-55.

杉村和美（1999）. 現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達　岡本祐子（編著）　女性の生涯発達とアイデンティティ　北大路書房，pp.55-86.

杉村和美（2005）. 女子青年のアイデンティティ探究―関係性の観点から見た 2 年間の縦断研究―風間書房

高村和代（2006）. 宗田・岡本論文「アイデンティティの発達をとらえる際の「個」と「関係性」の概念の検討」へのコメント　青年心理学研究，18，（印刷中）

鑪幹八郎（1994）. 乳幼児期とアイデンティティ―アイデンティティ形成の基礎として　こころの科学，54，37-40.

鑪幹八郎（2002）. 鑪幹八郎著作集Ⅰ　アイデンティティとライフサイクル論　ナカニシヤ出版

Waterman,A.S.（1982）. Identity development from adolescence to adulthood: An extension of theory and a review of research *Developmental Psychology*, 18，341-358.

Winnicott,D.W.（1965）. *The maturational processes and facilitating environment* London:The Hogarth Press.
（ウィニコット，D. W. 牛島定信（訳）（1977）. 情緒発達の精神分析理論　岩崎学術出版社）

山田みき・岡本祐子（2006a）.「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ　日本発達心理学会第 17 回大会発表論文集，306.

山田みき・岡本祐子（2006b）. 対人関係の語りに見られる青年のアイデンティティ発達の特徴―アイデンティティ発達における「個」と「関係性」の視点から―　日本質的心理学会第 3 回大会アブストラクト集，47.

山本里花（1989）.「自己」の二面性に関する一研究―青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討　教育心理学研究，37，302-311.